

紀元千年期スカンディナヴィア史料論に向けて  
—デンマーク・イエリング王朝の事例—

小澤 実

1. 紀元千年期のスカンディナヴィア
2. イエリング王朝と史料研究
3. ルーン石碑論
4. 今後の論点

1. 紀元千年期のスカンディナヴィア

(1) イエリング王朝とは

本報告の分析対象となるイエリング王朝とは、ゴーム老王（958年死去）を祖とし、ハーラル青歯王（在位 958-987年）、スヴェン双髯王（在位 987-1014年）、ハーラル（在位 1014-1018年）、クヌート（クヌーズ）大王（在位 1018-1035年）、ハーデクヌーズ（在位 1035-1042年）という歴代6人の王からなる、現在確認しうるデンマーク最初の王朝である<sup>1</sup>。

このイエリング王朝は現在にまで連続と続くデンマーク王国の歴史においてことさら特殊な位置を占める。というのもスヴェン双髯王はその治世の当初よりデンマーク・ヴァイキングの統率者として北海の対岸にあるブリテン諸島、就中イングランド王国に攻勢をかけ、当時イングランド王であったエセルレッド 2世をノルマンディへと放逐し、1013年にはロンドンを陥落せしめ、イングランド王をなつたからである。ここに史上初めてデンマークとイングランドを二つながら支配する体制が確立するかに見えたが、翌1014年にスヴェンは急死した。スヴェンの息子クヌートは、エセルレッドを継いだエドモンド鉄腕王に勝利し、1017年に王国顧問団によりイングランド王に推挙された。さらに彼は、1018年に早世した兄ハーラルの後を継ぎ、再度デンマークとイングランドという二つ王の国を同時に支配する海上王国体制をせしめた。イングランドの統治システムを継承したクヌートは、この海上王国の安定化につとめ、1028年にはノルウェー王であったオーラヴ・ハーラルソンを追放して、ノルウェー王位をも獲得した。1035年にクヌートを後継したハーデクヌーズは、ノルウェーこそ継承しなかったものの、その死までデンマーク王位とイングランド王位を兼任しつづけた。

ハーデクヌーズの死後、デンマークはいったんノルウェー王による支配を受け、その後、1047年にクヌートの甥であるスヴェン・エストリズセンがデンマーク王位を継承した。以後、他のヨーロッパ中世国家と同様に、キリスト教を統治システムの中に組み込んだ中世国家としての歴史がはじまる<sup>2</sup>。デンマーク王国は、盛期中世においてはバルト海世界に影響圏を拡大し<sup>3</sup>、中世後期においてはカルマ

<sup>1</sup> イエリング王朝に関して、Thorkild Ramskou, *Normannertiden 600-1060*. København 1962, pp. 415-465; Aksel E. Christensen, *Vikingetidens Danmark paa oldhistorisk baggrund*. København 1969, pp. 223-241; Peter H. Sawyer, *Da Danmark blev Danmark. 700-1050*. København 1988; Else Roesdahl, “Denmark - a thousand years ago,” in: Przemyslaw Urbanczyk (ed.), *Europe around the year 1000*. Warszawa 2001, pp. 351-366; Id., “The emergence of Denmark and the reign of Harald Bluetooth,” in: Stefan Brink (ed.), *The Viking world*. London 2008, pp. 652-664; Niels Hybel, *Danmark in Europe 750-1300*. København 2003.

<sup>2</sup> 他の二国との比較史的観点による中世デンマーク史の簡潔な見取り図は、小澤実・薩摩秀登・林邦夫『辺境のダイナミズム』（岩波書店 2009年）、33-48頁。比較的新しい見取り図として、Michael Bregnsbo & Kurt Villads Jensen (eds.), *Det danske imperium - storhed og fald*, København 2005; Steen Busck & Henning Poulsen (eds.), *Danmarks historie - i grundtræk*, Århus 2002.

<sup>3</sup> 海上王国としての中世デンマーク像を提供するのは、Jens E. Olesen, “A Danish medieval <empire> in the Baltic (1168-1227)?”, in: Steinar Imsen (ed.), *The Norwegian domination and the Norse world c.1100-c.1400*. Trondheim 2010, pp.263-289; Esben Albrectsen, “Østersøimperiet 1157-1241”, “Fra valdemarstid til nordisk union 1241-1380”, in: Karl-Erik Frandsen et al.(eds.), *Konger og krige 700-1648* (Dansk udenrigspolitik historie 1), 2 ed., København 2006, pp.54-128; Thomas Riis, *Das mittelalterliche dänische Ostseeimperium* (Studien zur

ル連合の盟主となり<sup>4</sup>、近世初頭においてはルター派を国教とした複合国家体制を築いた<sup>5</sup>。しかし拡張主義的な政策を採り続けているように見えるデンマーク王国であるが、イェリング王朝とそれ以降の王朝とは、一点大きな違いがある。それは前者の眼が北海の彼方にあるブリテン諸島に向いていたのに対して、後者のそれはバルト海世界が対象であったからである。そういった意味においてイェリング王朝は、その前後の時代とは存立要件が異なるデンマークの歴史上特殊な一世紀であることが理解されるだろう。

## (2) デンマーク、スカンディナヴィア、ユーラシア

以上のように、歴史上特殊な位置を占めるイェリング王朝であるが、そのイェリング王朝が生成したデンマークは、政治地理学上、これもまた特殊な条件の下に置かれていたことを確認しておきたい。世界地図で確認すれば一目瞭然であるように、ユラン半島、島嶼部、スカンディナヴィア半島南部から構成されるデンマークの東西には、バルト海と北海という、北ヨーロッパ世界の大動脈たる二つの北洋が控えている。これはすなわち、北海とバルト海を往来する船舶はかならずデンマークの領内を通過せねばならないということである。もちろん東欧から西欧へ導く陸路を用いることによって、デンマークを迂回することは可能であるが、前近代世界とりわけ初期中世においては、海路を利用する方が、積載量やスピードという点ではかたがた有利であったことは間違いない。

またデンマークは、北欧、西欧、東欧という異なる文化圏が交錯するまさにその焦点に位置していたことも指摘しておかねばならない。初期中世においてはルーン文字文化圏と言い換えても良いスカンディナヴィア世界は、紀元千年という時代において、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンという三つの王国が胚胎しつつあった<sup>6</sup>。しかしそれぞれの王国は、各国がおかれた地理的条件のため、外的世界とのつながりという点では全く重なりをみせていなかった。三国の中で大陸世界と積極的な接触を持っていたのはデンマークのみであった。イェリング王朝期のそれは、大陸北東部においてヘゲモニーを握るオットー朝ドイツと国境を接し、かつ新興国ポーランドとも利害の対立する位置にあった。

ヴァイキング時代以前のグズメ・ルネボー複合遺跡にみられるように、初期中世以来デンマークが必然的に富を蓄積する箇所に位置していたことは確かであるが、8世紀に入り、ユラン半島の付け根にある交易地へゼビューが、スウェーデンのビルカやノルウェーのカウパングとならび、スカンディナヴィア世界における富の交換地として台頭してきた。イブン・ルスタライスラム世界からの商人も観察しているように、ゼビューは、琥珀、毛皮、奴隷といった北方世界の産品を集積し、それを必要とする東西世界へと分配する交易地であった<sup>7</sup>。貨幣研究の現状に照らすならば、スチューレ・ポリ

---

Geschichte des Ostseeraumes IV). Odense 2003.

<sup>4</sup> カルマル連合期のデンマークに関して、Esben Albrectsen, “Kalmarunionen 1380-1448”, “Middelalderens slutning 1448-1523”, in: Karl-Erik Frandsen et al.(eds.), *Konger of krige 700-1648* (Dansk udenrigspolitik historie 1), 2 ed., København 2006, pp.130-210; Anders Bøgh, *Seiren i kvindens hånd. Kampen om magten i Norden ca.1365-89*. Århus 2003; Vivian Etting, *Fra fællesskab til blodbad. Kalmarunionen 1397-1520*. København 1998; Troels Dahlerup, *De fire stænder, 1400-1500* (Gyldendahl og Politikens Dnmarkshistorie 6), København 1989; Aksel E Christensen, *Kalmarunionen og nordisk politik 1319-1439*. København 1980;

<sup>5</sup> Paul Douglas Lockhart, *Denmark, 1513-1660. The rise and decline of a renaissance monarchy*, Oxford 2007.

<sup>6</sup> ノルウェーに関して、Sverre Bagge, *From Viking stronghold to Christian kingdom: State formation in Norway, c.900-1300*, København 2010. スウェーデンに関して、W. Duczko, “Continuity and transformation: The tenth century AD in Sweden”, in: P. Urbanczyk (ed.), *The Neighbours of Poland in the 10th Century*, Warsaw 2000, pp.7-36; W. Duczko, “A.D.1000 - the point of no return for the kingdom of Sweden”, in: P. Urbanczyk (ed.), *Europe around the Year 1000*, Warsaw 2001, pp.367-378; W. Duczko, “The fateful hundred years: Sweden in the eleventh century”, in: P. Urbanczyk (ed.), *The Neighbours of Poland in the 11th Century*, Warsaw 2002, pp.11-21.

<sup>7</sup> イスラム世界とスカンディナヴィアとの関係は、Egil Mikkelsen, “The Vikings and Islam”, in: Stefan Brink (ed.), *The Viking world*. London 2008, pp.543-549; Anne Kromann & Else Roesdahl, “The Vikings and

ーンがかつて論じたように<sup>8</sup>、スカンディナヴィア世界が東方世界と西方世界をつなぐ動脈であったことは、現在否定されるどころか、ますます確実な事実として了解されつつある<sup>9</sup>。そのようなスカンディナヴィアの位置づけは、ヨーロッパ半島をそのみで完結した世界として理解するのではなく、ユーラシア大陸の一部として、またアメリカ大陸ならびにアフリカ大陸を含めた前近代世界システムを構成する要素の一つとして捉えるためには、不可欠の視点である。

## 2. イェリング王朝と史料研究

### (1) ヴァイキング研究と史料研究

イェリング王朝を含めた初期スカンディナヴィア研究は、史料研究がもっとも強く求められるという点で、ブリテン諸島、大陸、地中海世界といった他の地域を圧倒している。11世紀以前の当該地域がわたしたちに伝えている同時代の文献史料は、ルーン碑文とスカルド詩のみである。しかしながら19世紀以来の研究者たちが好んで用いた史料は、この二つの同時代史料ではない。ひとつは13世紀にアイスランドで編纂された文芸色の濃いサガ史料群である。もうひとつは同時代の外国の年代記である。そしてさいごに考古学資料である。初期スカンディナヴィア世界のなかで生み出された同時代史料の貧困という事実は、かなり早い段階からさまざまな史料類型に訴えることを当該時代の研究者に要求してきたのである。もちろん現在の水準から見て、19世紀から20世紀初頭の史料解釈には多くの問題がある。文献史料に関しては、テキストの情報伝達の経路を顧慮せずに利用したことで、歪曲された情報をそのまま採用するという弊害があり、考古学資料に関しては、発掘された遺物のコンテキストを無視したことにより、その遺物が同時代に果たした役割を見失うということもあった。

同時代史料の欠如という歴史的な困難に直面していたイェリング王朝研究において、史料研究は不可欠であった。すでに確認したようにより厳密な史料解釈とその組み合わせを訴えたのは、イギリス人研究者ピーター・ソーヤーの『ヴァイキングの時代』であった<sup>10</sup>。年代記史料の持つ情報のゆがみや視線の一方向性を指摘し、考古学資料や古銭学資料の積極的利用について訴えた本書は極めて示唆的な内容をふくんでいる。しかしながらソーヤーの著作がこの世に問われたのは1962年であり、それ以来半世紀が経過している。史料論の隆盛によって文献史料そのものへの問いかけとそこからの情報摂取は深化した。わたしたちはソーヤーの問題意識を継承しつつも、現在の史料研究状況にふさわしい成果を導き出さねばならない。

ヴァイキング時代のスカンディナヴィア史料研究の貧しさには理由がある。ひとつは史料解読上の技術的な問題である。たとえばデンマーク・ヴァイキングの研究には、彼らが展開した地域の史料を読むためにラテン語に加え古英語が、ノルウェー・ヴァイキングの研究には、ラテン語と古英語に加え、古ノルド語、古アイルランド語、古スコット語、古ウェールズ語などが、スウェーデン・ヴァイキングには古ロシア語、中世ギリシア語、アラビア語、中世ペルシア語、古アルメニア語などが必要となってくる。もう一つは史資料の多様性である。文献史料だけでも年代記、編年誌、法、証書、韻文など様々な類型があり、それに加えて、ルーン石碑、考古遺物（墓地や船舶）、古銭、固有名詞（地

---

the Islamic lands”, in: *The Arabian journey. Danish connections with the Islamic world over a thousand years.* Århus 1996, pp.9-17

<sup>8</sup> S・ボーリン「マホメット、シャルルマーニュ、及びリユーリック」H・ピレンヌ他（佐々木克巳編訳）『古代から中世へ ピレンヌ学説とその検討』（創文社 1975）、133-85 頁。

<sup>9</sup> Roman K. Kovalev, & A. C. Kaelin, “Circulation of Arab silver in medieval Afro-Eurasia: Preliminary observations”, *History Compass* 5 (2007), pp. 560-580. なお近年、移動先におけるエトノジェネシスという観点から初期中世のスカンディナヴィア人を捉え直す研究が増加している。Lesley Abrams, “Diaspora and identity in the Viking Age”, *Early Medieval Europe* 20 (2012), pp. 17-38; Clare Downham, “Viking ethnicities: a historiographic overview”, *History Compass* 10 (2012), pp.1-12.

<sup>10</sup> Peter H. Sawyer, *The age of the Vikings*, 2 ed. London 1971. 本書の初版は1962年であるが、ソーヤーはその後の批判を受けて、第二版で初版の内容を大きく書き換えた。北欧のヴァイキング研究は、歴史学にせよ考古学にせよ、本書のインパクトを大きく受けている。

名と人名) などがある。いずれも断片的であり、一つだけでなんらかの確定的な事実を提示できるわけではない。

たしかにこのような困難を克服して、ドーン・ハドリなどは、いわゆるデーンローにおける社会構造を明らかにした<sup>11</sup>。しかし彼女の研究は希有な例であり、ヴァイキング世界のすべてが現在要求される水準で解明されているわけではない。しかしながら史料研究こそが歴史研究の基本であることを思い起こすならば、イェリング王朝を解明するためには、イェリング王朝に関する史料研究も徹底的になされねばならない。

## (2) イェリング王朝を証言する史資料

本節ではイェリング王朝研究に必要な史資料について若干の考察を試みる。ソーヤーが行ったように、イェリング王権の研究にとっても、文献史料にとどまることなく、考古学資料を利用することは不可欠である。文献史料では接近し得ない船舶、貨幣、墓地、居住地遺構などは、問題設定の仕方によっては、文献史料よりも雄弁にイェリング王権の実態をあらわにする。しかしここでは文献史料にのみ限定し議論を進めたい。

議論に先立ち、イェリング王朝史資料の大前提についても述べておきたい。すでに見たように、イェリング王朝の歴史は、スヴェン双髯王によるイングランド侵攻以前と以後で大きく分かれる。つまりイェリング王朝の前半史はデンマーク内での権力の確立プロセスであり、後半史は海上王国の形成と運営のプロセスである。そしてこの二つに分かたれた歴史は、そのまま史料の証言状況にも反映される。

イェリング王権前期に関して最も重要な文献史料は『ハンブルク司教事績録』である<sup>12</sup>。くわえてアイスランドで成立した「国王サガ」と呼ばれる史料ジャンルも、イェリング王権と周辺権力との関係を考察するに際して重要なデータを提供する<sup>13</sup>。他方で後期になると、前期とは全く異なる史料状況が現出する。イングランド王国の公式記録と言っても良い『アングロサクソン年代記』<sup>14</sup>、クヌートの妻であるエンマに捧げられた『王妃エンマ讃』<sup>15</sup>、そして12世紀のアングロノルマン期の年代記群に、一定程度の詳細さをもってイェリング諸王の活動が記録されている。それだけではなく、国王証書やクヌート法といったイェリング王権の行政を直接証言する史料もまた入手することができる。

一見すると、イェリング王朝に関しては多種多様な文献史料があり、なぜイェリング王朝研究が進展しないのかいぶかしむ向きがあるかもしれない。しかしながら、それぞれの史料の成立状況とそれに起因する証言力の差異を考慮に入れるならば、研究者たちが足踏みしている現状を納得することができるだろう。問題となるいくつかの史料論的論点をあげておこう。ひとつは主要叙述史料の成立年代が同時代とは言えないことである。イェリング前期を例に取ろう。当該時代を証言する『ハンブルク司教事績録』の推定執筆年は1075年、「国王サガ」は12世紀以降、デンマークの年代記もやはり

<sup>11</sup> Dawn Hadley, *The Northern Danelaw, its social structure, c.800-1100*, London 2000.

<sup>12</sup> “Magister Adam Bremensis, *Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*”, in: Werner Trillmich & Rudolf Buchner (eds.), *Quellen des 9. und 11. Jahrhunderts zur Geschichte der hamburgischen Kirche und des Reiches*, 7 ed. (AQdGA 11). Darmstadt 2000, pp. 135-503.

<sup>13</sup> かつて史料論的なアプローチがわずかであった国王サガに関する研究は進展しつつある。ただし、デンマーク王の記述についての研究はほとんど無い。Shami Ghosh, *King's sagas and Norwegian history* (The Northern World 54), Leiden 2011.

<sup>14</sup> Charles Plummer (ed.), *Two of the Saxon Chronicles, Parallel*, 2 vols. Oxford 1892-99. 『アングロサクソン年代記』を対象とした研究は膨大であるが、さしあたり、Simon Keynes, “Manuscripts of the Anglo-Saxon Chronicle”, in: Richard Gameson (ed.), *The Cambridge history of the book in Britain, I: c. 400-1100*, Cambridge 2011, pp. 537-52; Alice Jorgensen (ed.), *Reading the Anglo-Saxon Chronicle. Language, literature, history* (Studies in the early middle ages 23). Turnhout 2010.

<sup>15</sup> Alistair Campbell (ed.), *Encomium Emmae Reginae*, with introduction added by Simon Keynes, Cambridge 1998.

12世紀以降であり、ゴーム老王やハーラル青歯王が生きた時代から百年以上も経過している。第二に史料文言のソースとなる証言者が多様かつその証言ルートが複雑であることである。これもやはり『ハンブルク司教事績録』を基に考えてみたい。わたしたちは『事績録』がゴームの治世よりも百年以上のちに作製されたものであることを確認した。しかしながら『事績録』のゴームに関する記述は、『事績録』の著者であるブレーメンのアダムが、同時代のデンマーク王であるスヴェン・エストリズセンの宮廷に情報収集に赴き、聞き書きした箇所である。当然のことながら、スヴェン・エストリズセンもゴームと同時代人ではないため、アダムに語った彼自身の記憶がなにに基づくのかを確定しなければならない。実のところ、小澤によれば、『事績録』に記されているゴームの姿は、スヴェンが語ったゴームの姿を伝えているわけではなく、アダムが、『事績録』の献呈主であるハンブルク大司教アダルベルトが進める政策に資するために、スヴェンの情報を歪曲して描き出した偽史であると考えられる<sup>16</sup>。このように根本史料とみられた記述ですらも記述内容を単純に鵜呑みにすることができないのである。

以上のように、イェリング王朝を巡る文献史料には、同時代のイングランドや大陸と比べると、基礎的な事実を再構成するのにいくつもの障害のあることがわかる。これこそが、イェリング王朝研究の進展を妨げる最も大きな理由であった。しかしながら、実のところ、スカンディナヴィア内部にも、同時代に作製されたテキストは存在する。ルーン石碑とスカルド詩である。両者については言語史的な価値が高いため、すでにほぼすべてのテキストを収める刊本は準備されており、かつまた文献学者、言語学者、文学者による重厚な研究は存在していた<sup>17</sup>。しかしながら、その多くは同時代の社会コンテキストから切り離された状態での利用であり、歴史学者による利用とその成果は近年になってようやくあらわれつつある。以下では二つの同時代史料のうちルーン石碑に焦点を当て、歴史学としてのその利用方法について論じてみたい。

### 3. ルーン石碑論

#### (1) ルーン石碑の機能

ルーン石碑とは、死者を記念するためにルーンでテキストを刻んだ死者記念碑であり、「XはYを記念してこの石を建てた」という定型句を特徴とする。石碑と建てるという慣習は後期ローマ時代の刻銘墓石にさかのぼるが、それが北欧に持ち込まれた後、独自の展開を遂げるようになった。最古の石碑のひとつはノルウェーのエストフォルで発見された4世紀末から5世紀初頭にさかのぼるトゥーネ石碑である<sup>18</sup>。しかしながらルーン石碑が爆発的に増加するのは、まさにスカンディナヴィア人が周辺諸国に拡大した紀元千年前後という特定の時代である。この時期に建立されたと比定される石碑の数は、デンマークで200、ノルウェーで50、スウェーデンで2500である<sup>19</sup>。

このルーン石碑を、ただの文字テキストではなく物質情報を内包する「モノ」として見た場合、いくつかの社会的機能が確認できる<sup>20</sup>。ひとつは石碑本来の目的でもある死者記念碑としての機能である。生き延びたXは、死者Yのために石碑を建立し、そうすることによって、両者が所属する共同体において死者Yの記憶を永続的なものとする。しかし石碑の機能はこれだけにとどまらない。ビルギ

<sup>16</sup> 小澤実 『『ハンブルク司教事績録』における「ウンニ伝」の役割』加納修編『歴史におけるテキストの布置 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第12回国際研究集会報告書』（名古屋大学大学院文学研究科 2012年）、印刷中を参照。

<sup>17</sup> 小澤実 「中世アイスランド史学の新展開」『北欧史研究』24（2007）、151-154頁。

<sup>18</sup> Terje Spurkland, *Norwegian runes and runic inscriptions*, Woodbridge 2005, pp.35-42.

<sup>19</sup> ヴァイキング時代に建立されたルーン石碑のカatalogは、Birgit Sawyer, *The Viking-Age rune-stones. Custom and commemoration in early medieval Scandinavia*, Oxford 2000.

<sup>20</sup> ルーン石碑をモノとして見る研究は増えつつある。Marco Bianchi, *Runor som resurs. Vikingatida skriftkultur i Uppland och Södermanland* (Runrön 20). Uppsala 2010; Lydia Klos, *Runensteine in Schweden. Studien zu Aufstellungsort und Funktion* (Ergänzungsbände zum Reallexikon der Germanischen Altertumskunde 64). Berlin-New York 2009.

ット・ソーヤーは、石碑のテキストに X と Y の名前だけではなく、「親子」、「夫婦」、「主従」といった両者の関係を明示することから、ルーン石碑は、生者 X が Y との関係を共同体内に告知することを目的するものだと主張した<sup>21</sup>。それはすなわち、生者 X が Y の財産を継承する立場にあることを文字を刻むことで主張していると理解することができる。激増するルーン石碑の機能はまさにこの点にあり、その背景には、スカンディナヴィア人の海外への拡大、襲撃、定住、征服の拡大において命を落とす財産保有者が急激に増えたという歴史的事実があったことも同時に指摘している<sup>22</sup>。

以上の二つの機能を認めた上で、ルーン石碑には第三の機能があったことを小澤は主張する。つまり政治的表徴としての機能である<sup>23</sup>。刊本のテキストではなく、「モノ」として現物を見れば明らかであるように、3000 近くのにぼるルーン石碑には、一つとして同じものはない。4メートル近くの高さを誇る石碑もあれば 50 センチ程度の小石碑もあり、美しい図像を備えた石碑もあればテキストのみのももある。史料類型としてのルーン石碑の共通点はただ、「X は Y を記念してこの石を建てた」とする定型句のみである。それではなぜ、個々のルーン石碑は定型文テキスト以外でこれほどまでに異なっているのだろうか。それは偶然の産物なのだろうか。そうではなく、この石碑の建立された時代が、石碑の差異化が社会的に要求される時代であったと理解するべきである。つまり建立者たちは差異化された石碑を建立せざるを得ない競合的環境の中に置かれていたのである。

それではなぜ、ルーン石碑の建立者たちは、競合する必要があったのだろうか。そこにはいくつかの歴史的背景が想定される。ひとつは、すでにビルギット・ソーヤーが指摘するように、紀元千年前後におけるスカンディナヴィア人の移動の激化と戦闘によって海外で命を落とす者が続出し、死者の財産の所有権を明らかにする必要に迫られていたことである。しかしそれだけではない。紀元千年前後のスカンディナヴィア世界は、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンという中世の三王権が生成するまさに政治的かつ社会的な変動期であり、中世王国のように必ずしも確立した権威が前提とされる社会ではなかった<sup>24</sup>。そのような社会にあっては王権のみに支配権が集中していたわけではないし、さらに言えば、その王権すら生成の途上にあった。このような流動的な社会においてルーン石碑は、王権を含む在地有力者が自らの権威と権力を誇示するための機能を果たし、その結果として、差異が生まれていたと想定することが可能ではないだろうか。さらにここで私たちが想定せねばならないのは、書物は読者がいて初めて機能するように、ルーン石碑もまたその視認者がいて初めて機能するという点である。ルーン石碑の差異は、建立者がその視認者にいかに印象づけるかによって多様化に至ったのではないかと推測される。

## (2) テキストとコンテキストの差異化

それでは具体的にルーン石碑のどの部分に差異が認められるのだろうか。ここでわたしたちは、ルーン石碑はそれ自体「モノ」であること、つまり、文字テキストのみならず、そのコンテキストも含めた双方から考察しなければ、石碑が当時の社会において果たしていた機能を再現することができないことを確認しておかねばならない。以下では、小澤の議論に基づき、まずルーン石碑の作成過程を

<sup>21</sup> Sawyer, *The Viking-Age rune-stones*, pp. 47-70.

<sup>22</sup> Birgit Sawyer, "Viking-Age rune-stones as a crisis symptom", *Norwegian Archaeological Review* 24 (1991), pp. 97-112.

<sup>23</sup> 以下の議論は Minoru Ozawa, "Rune stones create a political landscape: Towards a methodology for the application of runology to Scandinavian political history in the late Viking Age," *HERSETEC: Journal of hermeneutic study and education of textual configuration* 1-1 (2007), pp. 43-62 & 2-1 (2008), pp. 65-85 に基づく。

<sup>24</sup> 各国の王権形成プロセスについての一般的理解は、Stefan Brink (ed.), *The Viking world*, London 2008; Kunt Helle (ed.), *The Cambridge History of Scandinavia, vol.1: Prehistory to 1520*, Cambridge 2003 の該当部を参照。スカンディナヴィア全体を視野に入れ議論をたてようとしているのは、Eric Christiansen, *The Norsemen in the Viking Age*, London 2002; Peter H. Sawyer, *Kings and Vikings. Scandinavia and Europe AD700-1100*, London 1982.

確認し、しかるのちに、テキストの差異化とコンテキストという両面から、ルーン石碑の差異化について整理しておきたい。

ルーン石碑は、それ自体自然物ではなく人工物であるために、いくつかのプロセスを経て完成へと至る。簡潔にまとめれば、1. テキストの草稿、2. 石材の獲得、3. テキストの刻銘、4. 装飾と彩色である。1. は建立者自身によっておこなわれるが、2から4まではそれ以外の人物がかかわる。とりわけ最後の二つの段階は、ルーン彫師 (rune carver) とよばれる専門職によって遂行される。以上のようなプロセスを思い起こせば、ルーン石碑の作製には、多くの人材と時間の投資が前提となり、したがってそれにとまなうコストも必要となってくる。あえて単純化して言えば、多くのコストを投資することができる建立者はそれだけ、当時の基準において視認者に訴えかける石碑を完成させることになる<sup>25</sup>。この点に、「モノ」としてのルーン石碑を分析することにより、建立者の社会的ならびに政治的地位の反映を読み取る手がかりがあると思われる。

次にテキスト並びにコンテキストの差異化について、事例を挙げながら整理しておきたい。まずはテキストの差異化である。すでに述べたように、ルーン石碑テキストの基本は「XはYを記念してこの石を建てた」という定型句である。ルーン石碑テキストは、この定型句を様々な要素が修飾することによって差異化する。この差異化には三つのレベルがあり、(a) XとYの関係を明確化する差異化、(b) XやYの地位・位階・評判を添える差異化、(c) XやYに関する事績を記述する差異化である。より具体的に見ておきたい。

(a) XとYの関係を明確化する差異化

アッテは、(その息子) ソーステンを記念してこの石を立てた<sup>26</sup>。(DR260)

ここでは(その息子) という添え句により、X(アッテ)とY(ソーステン)の社会的関係を明示している。これによって、アッテとソーステンが親子関係にあったことがこの石碑の情報を共有する共同体内に周知される。

(b) XやYの地位・位階・評判を添える差異化

トーレは、(その息子にして)【非常に勇敢な戦士】インゲルドを記念してこの石を立てた<sup>27</sup>。(DR94)

ここではまず、(その息子にして) という添え句により、X(トーレ)とY(インゲルド)の社会的関係を、しかるのちに【非常に勇敢な戦士】という添え句によりYの社会的地位と評判を明示している。これによって、トーレとインゲルドが親子であると同時に、インゲルドが【非常に勇敢な戦士】と評判されていたことがこの石碑の情報を共有する共同体内に周知される。

(c) XやYに関する事績を記述する差異化

【スヴェンの従者】ソーロールヴは、[戦士たちがヘゼビューを占拠したときに死んだ](縁者)エーリクを記念して、この石を建てた。そして彼は【統率者であり、雄々しい戦士であった】<sup>28</sup>。(DR1)

<sup>25</sup> ここで当時のスカンディナヴィア人のリテラシーが問題となる。彼らが一般に文字を読めたかどうかは議論の対象となっている。Svante Fischer, *Roman imperialism and runic literacy. The westernization of Northern Europe (150-800AD)* (Aun 33). Uppsala 2005. Terje Spurkland, “Viking Age literacy in runes – a contradiction in terms?” in: Pernille Hermann (ed.), *Literacy in Medieval and Early Modern Scandinavian Culture*. Odense 2005, pp. 136-150,

<sup>26</sup> DR260: **ati : rispi : stin : þasi : aft : þurstin : sun : sin**

<sup>27</sup> DR94: **tuli : (ri)s [þ] (i) : stin : .þasi : aut ilalt : sun : sin : miuk(:)(k) (u) [.....] k : þau : mun(u) mini : mx(r)gt : iuf [:] þirta :**

<sup>28</sup> DR1: **Side A: þurlf rispi stin þansi himþigi suins eftiR erik filaga sin ias uarp: side B: tauþr þa trekiar**

ここではまず、(縁者) という添え句によって X (ソーロールヴ) と Y (エーリク) の社会的関係を、しかるのちに【スヴェンの従者】という添え句によって X の社会的地位、【統率者であり雄々しい戦士】という添え句によって Y の社会的地位と評判を、さいごに【戦士たちがヘゼビューを占拠したときに死んだ】という添え句によって Y の事績を明示している。

きわめて図式的に整理すれば、各ルーン石碑間のテキストの差異化は以上のように行われる。次に私たちが整理しておかねばならないのは、コンテキストの差異化である。これには次の三つのレベルを想定できる。つまり (a) テキストのコンテキストである石碑それ自体の差異化、(b) 石碑それ自体のコンテキストである設置空間の差異化、そして (c) 設置空間のコンテキストである同時代の社会コンテキストの差異化である。

(a) 石碑それ自体の差異化では、テキストの支持体である石塊それ自体に差異化の指標をみる。その構成要素は、(a1) 字体、(a2) 字列レイアウト、(a3) 背景装飾、(a4) 彩色、(a5) 石塊の形状である。すでに述べたように、石碑を作製するためには、石材を入手し、しかるのちにルーン彫師にルーンとその背景装飾の彫刻を依頼しなければならない。ここにコストが発生する要因がある。まずルーン石碑に必要な石材は、必ずしもスカンディナヴィア世界で普遍的に入手できるわけではない。デンマークなど基本的に平野であるし、石切場が豊富にあると思われるノルウェーやスウェーデンであっても、衆人の耳目を引くための素材を建立場所の近郊で入手できるとは限らない。たとえば、ノルウェーのオプランドにたつアルスタード石碑は、石材がオスロ北方のリングリーケから運ばれたと記録されている<sup>29</sup>。つぎにルーン彫師の問題に移ろう。ルーン石碑のテキストと場合によってはその背景装飾を刻みそして彩色するためには、ルーン彫師と呼ばれる専門職を必要とした。とりわけスウェーデンのウップランド地方を中心に活躍したエーピルとよばれる名前の個人／工房が著名であり、彼らは時として、自らが刻んだ石碑に「X が (ルーン) を刻んだ」という定型句を残すことがある<sup>30</sup>。

(b) 設置空間の差異化では、さらに細分化して考察せねばならない。つまり (b1) 設置された自然空間がどこであるか (平野、高台、海辺など)、(b2) 設置された文化空間がどこであるか (橋、道路、集会地、墳墓、教会など)、(b3) 複数の石碑を組み合わせたモニュメント化により、そこにどのような機能と意味が生まれるかといった観点が想定されるのである。すでに述べたように、ルーン石碑は視認者がいて初めて機能するため、設置空間をどこにするかは、石碑が適切に機能するために配慮すべき要点であることは容易に想像される。またルーン石碑は、ただ一つで屹立することもあれば、複数の石碑を組み合わせてモニュメント化することもあった。モニュメント化は、全体を大きく見せることで、遠方からも容易に視認できるとともに、モニュメントそれ自体の大きさが、建立者の権威を反映すると理解することも可能である。

(c) 社会コンテキストの差異化では、その石碑が建立された時代の社会的背景を考慮しなければならない。たとえば異教時代に建立された石碑は、キリスト教が導入された後の社会においては、それ以前の社会において持ち得た機能を喪失し、あらたな受容のされ方をされるのではないだろうか。DR209 は異教神トールへの信仰をあらわとし、おそらくはその信仰を共有する社会において機能し得た呪詛文を刻んでいるが、こうした呪詛文は、キリスト教化して以降のデンマーク社会においては大きな意味を持たなくなる。キリスト教の導入だけではなく、イングランドの征服、他国との関係の変

satu um haiþa bu ian : han : uas : sturi : matr : tregR harþa : kuþr

<sup>29</sup> NlyR61: iurun : rais(t)j : s(t)ain : þina : af(t)ir : au.aun : is : (h)ana : ..(t)j : auk : furþi : af : hrikariki : u(t)an : urulb : aui (訳: ヨールン (Jorunn) は、彼女を所有した (と結婚した) …を記念してこの石を立てた。この石はウルヴォイ (Ulvøy) のリングリーケ (Ringerike) から持ち運ばれた。) 今後、石材の構成要素分析が可能となれば、石材の入手先や移動経路について大きな展望が開けるであろう。

<sup>30</sup> エーピルについては、L.- K. Åhfeldt, “Öpir – a Viking age workshop for rune stone production in central Sweden? A study of division of labour by surface structure analysis”, *Acta Archaeologica* 72 (2001) , pp. 129-57; Marit Åhlén, *Runristaren Öpir. En monografi* (Runrön 12), Uppsara 1997 を参照。

化、在地有力者と王権との競合、ラテン・カトリック文明装置（法、写本文化、外交システムなど）との接触が、紀元千年前後のスカンディナヴィア社会において連続かつ複合して起こっている。ルーン石碑は、このようにめまぐるしく社会コンテクストの変化を伴う空間において、機能することを要求された「モノ」であることを忘れてはならない。

### （3）事例としてのイエリング石碑

ここでは、以上述べた差異化の論点を念頭に置きながら、デンマークを代表するルーン石碑であるイエリング石碑を例にとって具体的な考察を行いたい。

イエリング石碑は、イエリング王朝の創建者ゴーム老王が妻チューレのために建立した第一イエリング石碑と、両者の息子ハーラル青歯王が両親のために建立した第二イエリング石碑がある。まずは第一イエリング石碑のテキスト分析をしておこう。

**【王】** ゴームは、**【デンマークの誉れである】**（その妻）チューラを記念してこの碑を建立した<sup>31</sup>。（DR41）

ここでは、（その妻）という添え句でゴームとチューラが夫婦であることを、さらに**【王】**によりゴームの地位を、**【デンマークの誉れである】**によりチューラの評判を明示している。他方で第二イエリング石碑のテキストは

**【王】** ハーラルは、（その父）ゴームと（母）チューラを記念してこの碑を立てるよう命じた。[これなるハーラルは、全デンマーク、そしてノルウェーを手中にし、デーン人をキリスト教徒となした]<sup>32</sup>。

であることから、（その父）ならびに（母）により建立者ハーラルと被建立者ゴーム並びにチューラが親子であることが、**【王】**によりハーラルの社会的地位が、[これなるハーラルは、全デンマーク、そしてノルウェーを手中にし、デーン人をキリスト教徒となした]によりハーラルが達成した歴史的事績が提示されている。

次に石碑それ自体の差異化についてみておきたい。ここでとりわけ注目すべきは、石塊の形状と背景装飾である。第一イエリング石碑は高さ 139cm の直方体で装飾を欠いているのに対し、第二イエリング石碑は、高さ 243cm で三角錐の形状をとり、とりわけ B 面にはイエリング獣とよばれる特徴的な獣の図像が、C 面にはキリスト磔刑の図像が彫り込まれている。これらの図像には当時は彩色が施されていたはずである。

以上は基本的な両石碑の基本的な情報であるが、ここで指摘しておくべきは、この二つの石碑は、イエリング・モニュメントとよばれる巨大王権モニュメントの一部をなす要素であるという点である。イエリング・モニュメントとは、二つのルーン石碑、異教的要素である二つの墳丘、そしてキリスト教的要素である教会から構成される、まさにデンマークが異教社会からキリスト教社会へと移行する瞬間を告げる歴史的モニュメントである。ここでその詳細は述べないが、このモニュメントは、異教の王であったゴーム老王が妻を埋葬した異教墓からいくつかのステップを経て現在残るかたちへと変化した<sup>33</sup>。したがって二つのルーン石碑もそうした建立環境の変化にともない石碑それ自体が持つ機

<sup>31</sup> DR41: Side A: kurmR : kunukR : ? : k(ar)þi : kubl : þusi : a(ft) : þurui : kunu Side B: sina tanmarkaR but

<sup>32</sup> DR42: Side A: haraltr : kunukR : þaþ : kaurua kubl : þausi : aft : kurmfapursin aukaft : þaurui : muþur : sina sa haraltr (: ) ias : saR uan tanmaurk Side B: ala auk nuruiak Side C: auk tani (karþi) kristna

<sup>33</sup> イエリング・モニュメントの変容については、Kraus Ransborg, “King’s Jelling. Gorm and Thyra’s place-Harald’s monument –Svend’s cathedral”, *Acta Archaeologica* 79 (2008), pp. 1-23; K. J. Krogh & B. Leth-Larsen, *Hedensk og kristent. Fundene fra den kongelige gravhøj i Jelling* (Vikingekingernes monumenter i Jelling 2). København 2007.

能と意味を変えていったはずである。この意味の変化すべてを読み解くことがイエリング・モニュメントの解説となるが、ここでは、二つの石碑が同じ空間に併置されているという事実へのみ注目し、その意味を解説してみたい<sup>34</sup>。

実のところ第二イエリング石碑は、デンマークの他のルーン石碑と比較すると、テキスト並びにそのコンテキストという点において相当特殊な石碑である。というのもそのテキストにおいて、建立者であるハーラルがたたえているのは、記念されている父母ではなく、彼自身であるからである。単なる死者記念碑であれば述べるはずもないハーラル自身の歴史的業績、つまり「これなるハーラルは、全デンマーク、そしてノルウェーを手中にし、デーン人をキリスト教徒となした」という部分こそがこのルーンテキストの中核であり、他の石碑の追随を許さない美麗かつ複雑な背景装飾もまた、この業績を印象づけるために彫り込まれたように思われる。さらに話を進めよう。ハーラルはこの第二イエリング石碑を、父ゴームが母チューラを記念して建立した第一イエリング石碑と直接見比べることのできる空間に設置した。イエリングを訪れた人物は、否応なくこの二つの石碑を見比べることになる。高さ 139cm の素朴な第一イエリング石碑と、高さ 243cm でかつ特徴的な装飾を持つ第二イエリング石碑を見比べたものは、第二イエリング石碑の建立者に対してどのような印象を持つであろうか。これはおそらく偶然ではない。ハーラル青歯王は意識して、父の石碑と自分の石碑を同じ空間に配置したのである。

このようなイエリング石碑の機能は、この石碑／モニュメントの視認者が誰であるかを考えるならば、さらに深く読み解くことができる。視認者は四つのレベルに分類される。まずはハーラルの支配下にあるデンマーク臣民であり、彼らはモニュメントを確認することで、イエリング王権の権威の確認をおこなう。第二に将来にわたるイエリング王権の子孫である。彼らはこのモニュメントにより、みずからの出自する王権が達成した歴史を記憶しそして確認することができる。第三にデンマーク外のスカンディナヴィア出身者である。彼らは自国の王権や在地有力者とイエリング王権との差異を確認することができる。そして最後に他国の使者である。彼らはルーン文字や古ノルド語に対する理解がなくとも、図像を確認することで、デンマークがキリスト教国家であることが確認可能である。ハーラルは、こうした視認者を意識しイエリング石碑を建立したと推測できる。イエリング石碑はただの死者記念碑ではなく、明らかに他の石碑との差異化をはかって建立された記念碑、すなわち政治的表徴なのである<sup>35</sup>。

#### 4. 今後の論点

以上述べてきたように、ルーン石碑を政治的表徴として読み解くアプローチにより、石碑そのものから、様々な情報を引き出すことが可能であることを論じてきた。ここでは、以上のようなアプローチにより今後議論が展開できる論点を三点あげておきたい。

<sup>34</sup> 現在二つのイエリング石碑は、モニュメントを構成する二つの墳丘の狭間に併置している。しかしながらこの二つの石碑は、10世紀以来現在に至るまで千年にわたる年月そこに立ち続けていたわけではなく、16世紀に土中から再発見され、墳丘の間に設置されたという経緯がある。したがって本来の位置関係をそのまま伝えているわけではないという点は強調しておかねばならない（筆者はかつてこの二つの石碑が併置されていることを前提に議論を進めた。小澤実「ルーン石碑と対話する イエリングの二つの石碑」『歴史と地理』624号（2009）、51-54頁）。しかしながら正確な位置はわからないにせよ近接した土中から発掘されたことは記録から確認できるので、この二つの石碑が同じ空間の中に建っていたと考えることは許されるだろう。イエリング石碑の発掘史に関して、J. Staecker, “Jelling-Mythen und Realität”, in: D. Kattinger et al. (eds.), *Der Ostseeraum und Kontinentaleuropa 1100-1600. Einflußnahme - Rezeption - Wandel*. Schwerin 2004, pp. 77-102.

<sup>35</sup> Minoru Ozawa, “In the shadow of the son: contextualising the Jelling rune stones”, Preprint in the webpage of the 7th international symposium on runes and runic inscription “Runes in context”, Oslo 2010 (<http://www.khm.uio.no/forskning/publikasjoner/runenews/7th-symp/preprint/ozawa.pdf>) .

## (1) 王の石碑の問題

まずは王の石碑という問題である。すでに検討したふたつのイエリング石碑だけではなく、王権にかかわるルーン石碑はいくつか確認できる<sup>36</sup>。添付資料では、仮に(1)国王自身が建立した石碑、(2)国王の血縁者による石碑、(3)国王の従士による石碑、(4)国王の名前に言及する石碑の四つに分類している。しかしながらここでわたしたちは興味深い事実気がつく。それは、これらの石碑の中で言及される国王は、いずれもデンマークの王に限られるという点である。

イエリング王朝と同時代のノルウェーにはオーラヴ・トリュグヴァッソン、オーラヴ・ハーラルソン(聖オーラヴ)、ハーラル苛烈王、スウェーデンにはエーリク勝利王といった歴史上著名な王を認めることができる。しかしながら後世における刻銘の追加を除けば、彼らの名前に触れる石碑は存在しない。他方でスウェーデンの場合、王権に関わる石碑は見受けられないにもかかわらず、東方遠征で著名なイングヴァールにまつわる石碑は40弱ほど認められる<sup>37</sup>。現段階ではこの現象に対する十分な説明はできないが、王の石碑に注目することにより、紀元千年期における三王国における王権のあり方の差異を考える手がかりとなるかもしれない。

## (2) 滅失石碑の問題

次に滅失石碑の問題である。すでに述べたように、現在コーパスに採録されているヴァイキング時代のルーン石碑の数は3000弱である。しかし毎年のように新出石碑は発見されており、コーパスから漏れていた石碑の情報は、かつては各国の考古雑誌が、オスロ大学付属歴史博物館ルーン研究室が毎年刊行している *Nytt om Runer* で報告されている。こうした状況からも容易に推測がされるように、現在伝来しているルーン石碑は、紀元千年前後に建立されたルーン石碑全体の一部であり、様々な理由で滅失した石碑も数多くあったと推測される。どれほどの石碑が失われてしまったのかは知るすべはないが、現存するルーン石碑に向き合うことで、本来あったであろう石碑について想起することも可能である。二例あげておきたい。

わたしたちはスヴェン双髭王自身が建立したと思われる石碑を一例のみ知っている。このDR3は、スヴェン王がその従士スケルゼを記念して建立したものである。しかしながら数多くの従士をしたがえているデンマーク王が、たった一人のためだけに石碑を建てたと考えることは難しい。たしかにスケルゼは、従士のなかでも特別な地位にあったものであるのかもしれないが、それでもそのような従士は複数いたと考える方が、つまり類似の石碑を複数建立したと考えるほうが自然であるように思われる。さらに言えば、国王であるスヴェンは、その父ハーラルや祖父ゴームが行ったように、自身の父ハーラル青歯王、母トーヴェ、妻スヴェントスラヴァを記念する石碑を建立したのではないだろうか。ただし母トーヴェと妻スヴェントスラヴァがスヴェンよりも早世したかどうかは史料上確認できないし、スヴェンは父ハーラル青歯王を987年に「ユムネ」に追放しているので、あえて石碑を建立しなかった可能性も除外はできない。

加えて言えば、スカンディナヴィアの外でルーン石碑が建立されたのか否かも一つの論点となる。たとえば、ロンドンのセント・ポール教会内で1852年に発見された石碑の断片には、「ギンナとトーキがこの石を建てさせた」という文言とともに、イエリング石碑の背景装飾と類似した図像が刻まれていた<sup>38</sup>。研究者はおおよそクヌートのイングランド侵攻に随伴してきた在地有力者によって建立さ

<sup>36</sup> Minoru Ozawa, "King's rune stones. A catalogue with some remarks", *HERSETEC: Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration (SITES 2)* 4-1 (2010), pp. 29-42.

<sup>37</sup> イングヴァール遠征と石碑に関しては、マッツ・G・ラーション(荒川明久訳)『悲劇のヴァイキング遠征 東方探検家イングヴァールの足跡 1036-1041』(新宿書房 2004年)を参照。加えて、J. Shepard, "Yngvarr's expedition to the east and a Russian inscribed stonecross," *Saga-Book of the Viking Society* 21 (1984-5), pp. 221-293.

<sup>38</sup> DR412: (ki)na: let: lekia :st in : þensi : auk : tuki :

れた石碑の断片であるという点で一致を見ているように思われる<sup>39</sup>。この解釈に基づくならば、イングランド、とりわけスカンディナヴィア人の影響力の強い地域においては、ルーン石碑が建立された可能性が高いということになる。

### (3) ルーン石碑から見たスカンディナヴィア三王権の比較

デンマーク、ノルウェー、スウェーデンの三王国は、いずれも紀元千年前後に成立した王国として、しばしばひとくくりに議論の俎上にのぼる。たしかに、ヨーロッパ史という枠組みの中で、スカンディナヴィア三王国は、東欧諸国と同じく、カロリング後継国家に遅れてキリスト教世界に参入した地域として理解することは可能である。しかしながら、近年しばしば試みられているこれら「遅れたキリスト教国家」の比較が明らかにしつつあるように、キリスト教化のプロセスや歴史叙述の伝統は、実のところ各国間においても大きな隔りがある。比較することで相違点を強調するか相同点を重視するかは論者の立ち位置に関わることであるが、まずは相違点を確認することが肝要であろう。

ルーン石碑においても三王国の状況は大きく異なる。すでに確認したように、現在に伝来するルーン石碑の数は、デンマーク 200、ノルウェー50、スウェーデン 2500 である。各国における自然地理上の差異を考慮したとしても、定住地における石碑の分布密度には明らかに差がある。このような差は、紀元千年前後にスカンディナヴィア三国において、ルーン石碑が実際に持ちえていた機能が異なるのではないかという予想がたちうる。(1)の王の石碑の問題とも密接に関わるが、それだけではなく、三国の社会構造そのものが異なることを示唆している。

以上、ルーン石碑を中心に、イェリング王朝の史料研究を論じてきた。繰り返すが、当該分野の史料研究はなお未開拓であり、フランク王国研究がそうであったような基礎的な調査が積み重ねられねばならない。他方で同時代史料の欠如はそれ自体興味深い現象であり、紀元千年前後のデンマーク／スカンディナヴィアがポスト・カロリング空間における史料の残存状況と比較することで、記録することに対する意識の差を見いだすことも可能であろう。

## 資料

### (1) 国王によるルーン石碑

DR41: Jelling-st.1, Tørrild hd., Veije a.

Side A: **kurmR : kunukR : ? : k(ar)þi : kubl : þusi : a(ft) : þurui : kunu**

Side B: **sina tanmarkaR but**

訳：王ゴームは、デンマークの誉れであるその妻チューラを記念してこの碑を建立した。

DR42: Jelling-st.2, Tørrild hd., Veije a.

Side A: **haraltr : kunukR : baþ : kaurua kubl : þausi : aft : kurmfapursin aukaft : þaurui : muþur : sina sa haraltr (:) ias : saR uan tanmaurk**

Side B: **ala auk nuruiak**

Side C: **auk tani (karþi) kristna**

訳：王ハーラルは、その父ゴームと母チューラを記念してこの碑を立てるよう命じた。これなるハー

<sup>39</sup> Katherine Holman, *Scandinavian runic inscriptions in the British Isles: their historical context* (Senter for middelalderstudier, Skrifter 4), Trondheim 1996, pp.28-38.

ラルは、全デンマーク、そしてノルウェーを手中にし、デーン人をキリスト教徒とした。

DR3: Heddeby-St. 3 (Danevirke-, Bustorf-St.), Gottorp a.

Side A: : **suin : kunukR : sati : stin : uftiR : skarþa sin : himþiga : ias : uas : farin : uestr : ian : nu :**

Side B: : **uarþ : tauþr : at : hiþa : bu**

訳：スヴェン王は、西方で命を落とし、いまはヘゼビューに埋葬される従者（himþigi）スケルゼを記念してこの石を建てた。

## （２）国王の一族によるルーン石碑

DR55: Sønder Vissing-st. 1, Tyrsting hd., Århus a.

**tufa lEt kaurua kubl mistiuis tutiR uft muþur sina harats hins kuþa kurms kuna sunaR**

訳：ミステイヴォイの娘トーヴェは、ゴームの息子善者ハーラルの妻であり、その母を記念してこの碑をつくらせた。

DR295-7: Hällestad-st. 1-3, Torna hd., Malmöhus län

Hällestad-st. 1

Side A: : **askil : sati : stin : þansi : ift [iR] : tuka : jurms : sun : saR : hulan : trutin : saR : flu : aigi : at : ub : salum**

Side B: **satu : trikaR : iftiR : sin : bruþr stin : a : biarki : stuþan : runum : þiR :**

Side C: **(kurms : tuka) : kiku : (nist) [iR]**

訳：エスキルは、(A) 彼の寛大な君トーケ・ゴームセンを記念してこの石を立てた。彼はウップサーラで逃走しなかった。(B) 戦士たちは、彼らの兄弟を記念してルーンの刻み込まれたこの石を、高台に立てた。(C) 彼らはトーケ・ゴームセンに仕えた。

Hällestad-st. 2

: **askautr : ristþi : stin : þansi (:)(:)(i)ftiR : airu : brþur : sin : ian : saR : uas : him : þiki : tuka : nu : : skal : stanta : stin : a : biarki :**

訳：アスゴットは、その兄弟エツレを記念してこの石を立てた。彼はトーケの従者（heimþiki）であった。今やこの石は高台に立つ。

Hällestad-st. 3

: **asbiurn : him : þaki : tuka : sati : stin : þasi : iftiR : tuka : bruþur : sin :**

訳：トーケの従者（heimþiki）エスバーンは、その兄弟トーケを記念してこの石を立てた。

## （３）国王の従士によるルーン石碑

DR1: Haddeby-st.1(Hedeby-St.), Gottorp a.

Side A: **þurlf risþi stin þansi himþigi suins eftiR erik filaga sin ias uarþ**

Side B: **tauþr þa trekiaR satu um haþa bu ian : han : uas : sturi : matr : tregR harþa : kuþr**

訳：スヴェンの従者（himþigi）であるソーロールヴは、戦士たちがヘゼビューを占拠したときに死

んだ縁者エーリクを記念してこの石を建てた。そして彼は統率者 (styrmaðr) であり、雄々しい戦士であった。

#### (4) 国王の名前に言及したルーン石碑

Sm42: Tuna-Rynnang.-st., Ryssby hd., Sunnerbro a.

**tumi × risti : stin : þansi : iftiR asur : brupur × sin × þan : aR : uaR : skibari : hrhls : kunuks**

訳：トゥンメは兄弟アッスルを記念してこの石を建てた。彼はハーラル王の skipari であった。

NlyR184: Evje p., Galteland, Evje hd., Aust-Agder f.

**A: arn : [stin] : risti : stin : þi[na] : iftir : bior : [s]un : sin : [sa : uar]tuþr : iliþi : þ[(a)s : knutrsoti : iklat]**

**B: inis : ko[þ]**

訳：アルンステインは、その息子ビョルを記念してこの石を立てた。彼は、クヌーズがイングランドを襲ったときに、戦士として死んだ。

Ög111

**uirikR : resti : stan : eftiR : þialfa : brupur : sin : trak : þan : aR uaR miR : knuti**

訳：ヴェーリングは、クヌートとともにあった勇敢な人士シャルヴィを記念してこの石を立てた。

U194

**alit raisa stain þinoftiR sik sialfan hontuknuts kialt anklanti kuþ hialbi hons ant**

訳：アレは、自分自身のためにこの石を立てた。彼はイングランドでクヌートの金を得た。神が彼の魂を安らがせますよう。

U240+241

**tan auk huskari auk suain auk hulmfrþr þaus miþkin litu rita stin þino aftiR halftan faþur þaiRa tans auk humfriþr at buanta sin**

訳：母と息子たちであるダン、フスカール、スヴェン、ホルムフリーズは、ダンとその兄弟の父であり、ホルムフリーズの夫であるハーヴダンを記念してこの石を立てた。

**n tan auk huskari auk sua(i)n l(i)tu rita stin aftiR ulfrik faþurfaþur sino hon hafþi onklanti tuh kialtakit kuþ hialbi þiRa kiþka salukuþs muþ(i)**

訳：そしてダン、フスカール、スヴェンは、祖父ウルヴリークを記念してこの石を立てた。彼はイングランドで二度の金を手に入れた。神と聖母が父と息子の魂を守りますよう。

U344

**in ulfr hafir onklati · þru kialtakat þit uas fursta þis tusti kalt · þa[kalt] þurktil · þa kalt knutr**

訳：ウルヴは三度ゲルドを手中にした。最初はトスティが支払い、ソルケルが、そしてクヌートが

#### (5) そのほかの王や在地有力者によるルーン石碑

DR2: Haddeby-st.2 (Vendelsplang-St I), Gottorp a.

Side A: **asfriþur : karþi : kum**

Top+Side B: **bl þaun**

Side A+fortsat: **aft : siktriku :**

Side B: **sun [:] (s)in : aui : knub**

訳：アスフリーズは、彼女とグヌーパの息子であるシグトリュグを記念してこの記念碑をつくった。

DR4: Haddeby-St.2 (Vendelsplang-St II, Gottorp-St), Gottorp a.

Side A: **asfriþr karþi kubl þausi tutiR uþinkaurs aft siktriuk k**

Top: **unu**

Side B: **k sun sin auk knubu**

Side C: **kurmR raist run(aR)**

訳：(AとB) オディンカル (Odinkar) の娘アスフリーズ (Asfrid) は、彼女とグヌーパ (Gnupa) の息子シグトリュグ王 (kong Sigtryg) を記念してこの記念碑をつくった。

(C) ゴーム (Gorm) がルーンを刻んだ。

DR26: Læborg-st., Malt hd., Ribe a.

Side A: **rahafnukatufi : hiau : runaR : þasiaft**

Side B: **þurui : trutnik : sina**

訳：ラヴン (Ravn) の子孫チュエは、その妃チューラを記念してこのルーンを刻んだ。

DR29: Bække-st.1., Anst hd. Ribe a.

**rafnuka : tufi : auk : futin : auk : knubli : þair : þriR : kaþu : hauk :**

訳：ラヴンの子孫チュエ、フエンゼンそしてグニユブレは、チューラの塚をつくった。

DR30: Bække-st.2., Anst hd. Ribe a.

**hribna : ktubi : kriukubþi aft : uibrukmpusin**

訳：レウネとトッベ (?) は、その母ヴィブロを記念して、この碑を作った。

DR133: Skivm-st., Års hd., Ålborg a.

**: þau : muþ(r)kin : þurui : auk [:] uþinkau(r) : a(u)k : kuþmu : ntr : þri [u : ra] is(þ)**

**[u :] kumbl : þausi : aift : ki [xx] : hin : huþska han : uas : l(a)nt : mana : baistr :**

**i : tan : marku auk : furstr :**

訳：母チューラと息子オディンカーとグズムンドは、huþska である ki…を記念してこの碑を立てた。彼はデンマークの「土地所有者 (lændmand)」のなかで最高にして第一の者であった。

DR209: Glavendrup-st. 2. (Voldtofte-st.), Skamby sn., Skam hd., Odense a.

Side A: **raknhiltr sa ti stainþansi auft ala sauluakuþa uial(i)þshaiþuiar þanþia kn**

Side B: **ala suniR karþu kubl þausi aft faþur sin auk hans kuna auft uar sin in suti**

**raist run aR þasi aft trutin sin þur uiki þasi runaR**

Side C: **at rita sa uarþi is stain þansi ailti iþa aft anan traki**

訳：(A) ラグンヒルドは、ヴィアの者たちの首領 (goði) であり、従者たちの高貴なるセインであるアッレを記念してこの石を建てた。(B) アッレの息子たちはその父を記念して、彼の妻はその夫を記念してこの記念碑をつくった。ソーテは自らの主君を記念してこのルーンを刻んだ。トールがこのルーンを神聖にせんことを。(C) 他の者を記念するためにこの石を傷つけもしくは動かす者は、法外者とされんことを。

DR212: Tillitse-st., Sønder hd., Maribo a.

Side A: **eskil : sulka : sun : let : res [a] sten : þena : eft : sialfan sik emun stanta meþ sten lifiR uitrint su iaR uan eskil**

Side B: **kristr hialbi siol hans apl santa migael**

Side C med Toppen: **toki risti runaR e(ftiR) þ(o)ru stiubmoþur sina kunu koþa**

訳：エスキル・スルケセン（Eskil Sulkesøn）は、自身を記念してこの石を立てさせた。この石が立ち続ける限り、エスキルがなしたこの記念文字は永遠に消えることはないだろう。キリストと聖ミカエルが彼の魂をお助けしますように。トーケは、卓抜した女性である義母トーラを記念して、ルーンを刻んだ。

DR217: Sædinge-st., Fuglse hd., Maribo a.

Side A: **þurui : kat : kauruan (:) stain : þansi : xxx (kruk)**

Side B: **uiar [:] sin : ian [:] han (:) uas xxalra triuuxx...**

Side C: **sutrsuia [:] au(k) [:] suþrtana kuau : at [:] ha [x] afnur minumsam**

Side D: **baistr : hanuas ... sutrsuia [:] [x] uk**

訳：チューラは、夫クローを記念してこの石を立てさせた。彼は、セアスヴェ人（Særsveerne）と南デー人（Syddanerne）の中で最も力があつた。クヴァルは、北に住む者の中で最良の首領を死に至らしめた。彼は、セアスヴェ人の…であつた。

DR230: Tryggevælde-st., Karise el. Hårlev sn., Fakse hd., Præstø a.

Side A: **rakhiltr sustiR ulfs sati stain þnnsi auk karþi hauk þansi auft aukskaiþ þaisi kunulf uarsin klamulanman (s)un nairbis faiR uar þa nufutiR þaibatri**

Side B: **sayarþi at rita isailtistain þansi**

Side C: **ipahipantraki**

訳：ウルヴの姉妹ラグンヒルドは、ネルヴェの息子にして、「勇猛な」男である夫グヌルヴを記念してこの石を立て、この塚をつくり、この船型の…。生まれにおいて彼に勝る者を見いだすことは難しい。この石を傷つけもしくは動かす者は、法外者とされんことを。